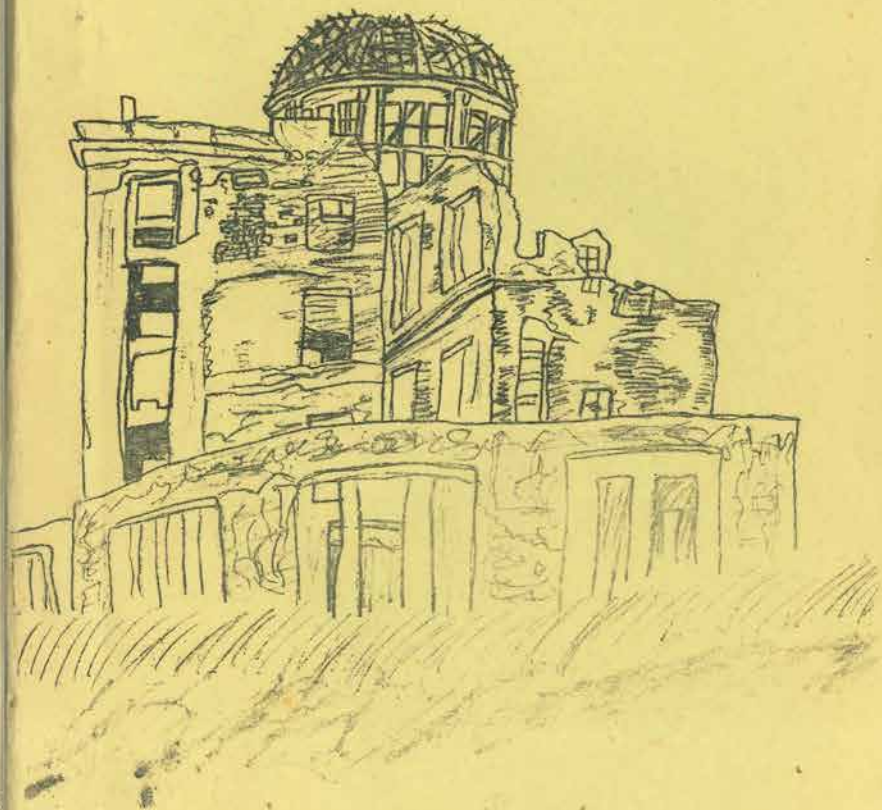


父母・祖父母が語る
太平洋戦争
【東光小学校, 6年】



1981. 2.



父母から聞いた戦争の結

父は、夏や冬になると、食量のある祖母の如家に行つて、リュックに、米、やさいなこを入れて、もうつてきたそうだし、中の物がこぼれたりしたこともあつたし、真冬なんかは、駅まで二時間も歩いたといつていた。それから、汽車が満員で、ある人は、石炭車に乗つていた。だからトンネルに入つたり、すすだらけになつた。たいへんだつただろう。

父の休んでいた小十谷というところには、山奥で、陣の施設がなかつたので、空しゅうはこなかつた。しがし祖母は、

焼夷弾を消す訓練をしたそうだ。

また、近くにある長岡という町では、兵器工場が、たくさんあつたので、空しゅうにあつた。小十谷にも、警報警報が出て、空をあつた船岡山という所に逃げて、夜赤いもの（焼夷弾）が、ちうちうあつたのが見えた。と言つていた。

自分の家でも野菜を作つて食べた。それでも足りなくて、さつまいもの葉や、つる、かぼちやの花などをわけて食べた。また、おつりに、小麦粉を水でねつたものを入れて食べるすいとんというものもあつたそうだ。

学校へ行くときや、遊園地へは、国民

ぼくもきいた戦争の話し

ぼくのお母さんは、小さく、太いのであまり、
わがたなか、たけど、お母さんは、こうべに
すんでいたそうです。たべものは、いもとか、
かんまい、おじやを食べていたそうです。小学校
の子供たちは、ちかくのある寺とかにいき、そ
こにすみました。ある都会にげんばくがおと
れて、家々がまっ赤にもえて、こちまぐくる
かこしんばいしたそうです。おませんそつが
なくてよかった。

戦争の話

ぼくのお父さんは戦争のころは五才だった。
だから言っていることがあやふやだった。
お父さんがいったのは
つちのうちにも、ほうきごうがあつたそうた。
アメリカのいこうきだこんでくると、近所
でうらのぼうろうこうにあつまったそうた。
そ水から、立川の方にアメリカのぼくだん
がおちたとかいっていた。

本をよんで

ぼくがよんだ本は、三つの塔という名の
戦争の本です。一人の子供の父あやが戦争
に行きとうとうしんでしまひました。この

ぼくがきいた戦争の話

本 藤 義人

おとうさんが一年生のころ第二次世界大戦
がおわったころアメリカ人がジイブにのって
おとうさんのまんまをとりました。おと
うさんは、初じめて外人にありました。おと
うさんは、化つとりとくやしさをいっぱいだ、
たということですが、このつすきは、またおと
うさんにききます。

本をよんで戦争のころいのがわかった

おわり



戦争の話

ぼくは、戦争の本を読んだ。読んだ本は、
「猫は生きている」という本を読んだ。

この本は、戦争中に、一かきの猫が、一家の家に住みついてから始まった。その猫は、いなずまという名まえがつけられて、いつもすほし、こく行動する。ある日、いなずまは、子猫を四ひき生んだ。そのとたんに、B29がせめてきて、猫はあふなくなった。昌男と猫たちは、はぐれてしまった。でも、猫たちは、がんばって、昌男のところまでいった。

ぼくは、いなずまが、四ひきの子猫をつれ

て、その子猫をさがして

戻ってきた。戻ってきたとき、真ん中に、
な、て、死んでいたり、やさだだれて、
うめき声をあげていたり、人たちが、足、
ふみばちをいくつに、ころがって、い
たら、見られぬものだと思った。

大やけどをした人には水を手して、
はいけたいので、がまんして、水さ、
のまはいて、死んでいて、人は、そう
とら、つらかっただろうと思った。

この本に出てくる子は、お母さんが
先に死んでしま、たので、かわいそう
だと思った。

てよく昌男のところまで、こられたなあ、
と思った。昌男ともう一人の光代という
子が、しょういん弾で死んでしまった。

とうとう、水がせめてきて、猫や昌男は
いかにでにけた。昌男はとうとう水でな
がされ、死んでしまいました。

ぼくは、おんな死んじゃうのが、思っ
て、かわいそうになった。

おこたちは、さいごの力をふりしぼ、て、
一かきのねこをさがしにいった。一かきの
のねこは、昌男のが、おさん、のところ、に
いた。でも、昌男のが、おさんは死んで、いた。
この本をよんで、さいごには全員死んで
しまっても、おこだけは生きていた。

そして、その子は、リサ、に、おこ、
られて、いた。そして、七歳、た、て、そ
の子のことが、ラジオ放送で、ちゃん
と元気で、いる、ことが、わが、て、
おすけた、人が、おに、いた。たら、その子
は、言、て、く、れた、人の子と、お、ほん、と
うの、親、だ、と、思、つ、て、いた、ので、かわい、そ
う、だ、と、思、つ、た。

でも、もし、この、時に、自分の、お
ん、とうの、親、が、大やけど、をして、ま、し
やうに、死、ん、で、い、た、こ、と、を、言、つ、たら
悲、し、い、だ、らう、と、思、つ、た。

そして、昌男、が、お、さん、の、子、も、大、き、く
な、つ、た、の、で、ぼ、く、は、も、う、そ、の、子、に、

なんとなりのことをき、たまたまいいと聞
った。

もしそのとき、す、そぐくしつづけ
ていたら、いざなことを思ひながら
一生を経るのほよくないな。思ったが
らだ。

でもその子は、このことを、さうう
すし。でいたけれど、なにも言わずに
がきんしていたのは、今まで、なんと
うい子のよめに言てくれた、お母さ
んに、話して、おからだと聞いた。

ぼくは、この子を、一人で、さうえ
てきた。お母さんは、さうとうの、さ
うを、したと思った。

戦争の話

身は、空襲の時、東京に住んでいた。
おじいさんは、戦争に行ってしまった。
で、おばあさんと二人になつてしまつた。
ので、おばあさんの、田舎が、埼玉県の越
生と言う所で、そこで疎開した。東京よ
り空襲が、すくなく、たまには日本軍人
がきて、警戒警報が鳴ると、近くに山が
あつたり、池の水をぬいで、その中にか
くれた。竹やぶに、たげたこともあつた。
。東京の方では、食べ物も配給で、こま
、ていた時、畑も、田んぼもあつたので
、食べる物には、あまりこまがらず、小遣

このような人たちは、キとたくさん
いたと思つた。

二人も戦争はもうあつてほしくないと
思う。

校一年生ぐらいの時、おじいさんは、戦
争が停つてきて、コンベイトウ・ビス
ケット・ドロップとかを、おみやげにも
が、たのを、おばあさんにさうだ。学校
に入る時、ランドセルは、カーキ色の、
ごつごつした、あつたの物だつた。教科
書も多しは、せんせんがう。わるい紙
の物だつた。三年生になつて初めて、ミ
ルクの給食だけ、はじめた。そのミル
クは今とはちがって、アメリカの遊覧軍
の配給の、かたい、かたまりをくたい
作。たまごの物だつた。お店では、あま
り、今みたいに、おやつみたいの物は、
たくさん売つてなくて、お食は、一つ五

田や穀物、ビスケットは二つ一円で、よく
売と買、て食べたそうです。小学校は、
近くで、うぐの畑の道さ、とあ、て行く
と、五分もかからない所に、およ、てい
た。夜になると、おじいさんと、おばあ
さんが物をこねて、うどんを作、てくれ
たので、おは、うどんを食、あきて、今
ではあの時のことを思、たと、うどん
が、大き、いにな、たそうです。学校の
足は、近くにズベと言う小さい、みか
んのできる山へ行、た。戦争がおわ、て
、前に住んでいた東京の行の家は、空襲
で、やかれてしま、たので、立川におじ
いさんが、車の部品工場を、いたしたので

戦争の話

父はなつかれそうに話してくれました。
この時、祖母も来ていたので、手伝、
てもらいました。

父は、一八三五年（昭和十年）山梨県
南都留郡へ今の都留市へに生まれ、六歳
のときに太平洋戦争が始、たそうです。
まだ小さ、たので、よく覚えていな
いそうです。一、九四一年（昭和十六年）
十二月八日に戦争が始、まり。最初は田舎
のせい、あまり戦争がわからな、た
が村から兵隊さん達が戦争に行くのを
村や駅へ見送りに行、たそうです。

、おじいさんは、そこに勤めて、その近
くの家に、借りて中学二年の夏休みに立
川の学校に転校してきた。埼玉とは、勉
強の進み方が、おうので、こま、たそう
です。父は、日野で生まれ育、た人なの
で、母よりは、あまり、戦争のいやな思
いは、して、いなか、たが、日野の、フイ
ルム工場に、爆弾が、落とされた時は、
すご、かったそうです。

ぼくは、この戦争の話聞いて、今の
ぼくたちは、食べ物にも、こま、た、物も
豊、たと思、たもう二、三、戦争な
と、おこ、てはいけないと思、います。

戦争が始、ま、て、一、二年すると近所
の農家のおじいさんや農馬も戦争に行、た
ある家では戦死した人もあり女性も田
畑や工場で働くようになり、学校の先生
も戦争に行、た。教科書も不足、みになり
始、めました。でも、みんな一生けんめい
でした。

そして、三年ぐらいた、つと、田舎でも
戦争をして、いるのがわかるようになり、
都会から学童疎開で生徒が、一、緒に学、び、
又、時には二部制で授業を受けたり、山
に行き畑に農作物を、つ、たりして働、いた。
鉄の橋を木に取りかえたり火の見やぐ
らや織り物の機械、鉄道はすべて固、めた

めに、共出ししました。

このころから食料も不足さみになり、
当はさつまいもを持って学校に行、ても、
何も持ってこない人もいた。

山の木もきりたおされ、針上近くまで畑
にな、たり、松の木は根は油を取るため
に掘り出され、さすきのほを海軍のうき
わに使うために集めた。さつまいものく
きやアカザなど食べれるものはすべて食
料にした。

都会から来た生徒の中には、栄養失調
にな、たり、風呂に入れな、たので、
うきごはんをよくして、薬をなくな、て
たいへんだ、た。

昭和二十年ごろに、夜間に敵機

がくるとサイレンが鳴ると明かりを消し
たり、防空ごうに入、たりしてじ、とし
ていた。

学生も学徒動員で戦争にかり出されて
いた。空にはB29が編隊を組みゆうり
うと飛んで行、たり飛行機がらどうが飛
とされ、それにはうこれ以上犠牲者を作ら
ず降服しなさいと書いてま、た。

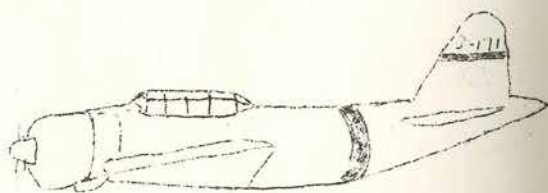
昭和二十年八月六日、広島にういに原
爆が落とされ次の日に長崎に落とされた。
そして、八月十五日、ういに天皇陛下が
敗戦をラジオで全国民にう返し、みんな
この近道を聞いてういました。

戦後は品物が不足して生活は困りました。

焼けあとにはみすぼらしいバラックが立
ち、戦争に行、た兵隊さん達が次々と引き
上げてま、て少しづつ村に生活がはじ
め、品物も少しづつ出回、てま、て生活もだ
んだん楽にな、てま、たが家族を失、た
家は戦争の悲しみが続いていた。

今考えると、戦争ほど悲惨なできごと
は、二度とくりがえしてはならないと父
は言、た。

ぼくもそう思、た。



父母から聞いた 太平洋戦争

二一

父の語では、食物の配給が配給キツプ制度になった。おかしや、ねん料がなくなつた。米が食べられなくなつた。な、そして、無慈悲に報が食ひつた。そして、いかにほ、てある、所を、うににげると、元の入口から、空中戦うようすを見ていたようだ。近くの、基地が、離陸した。三式戦闘機「隼」が、米軍の、爆撃機、F4U、P-51、P-47、P-38と戦う。い、だんし、家うを、あちたてうた。

母は、夜、空襲の報が、わ

きにと、えんがわに、ま、て、花火見物でもするやうに、東京、西を空襲する、日、を、した。大本心の空襲が、みんな、うそ、ぼろ、ぼろ、こんど、戦いに、か、て、いると思ひ、八月十五日の、終戦、直前まで、戦争にか、て、いると思ひ、て、いた、うた。

戦争といふのは、ぼろ、ぼろ、に、バカの、骨、でも、ぼろ、ぼろ、こんな戦争は、二、と、あ、て、ぼろ、ぼろ、と思ひ。

ハワイ、日本軍が、所

詩集から

帰郷

(山)

南方から戦い敗れて帰る人は

若くしてすでに翁めいていた

一日 山の湖に来て

うす紫に澄んだ水に足さふたした

その水の冷たさ 彼の脳天にしみ心に

しみた

親しげに燕々は 彼の肩先をめぐって

翔った

曇る割るやうなさけびをたてて

白い港のやうに彼の頭髮は風におど

た

夢みるやうに 山湖は喜れた

燕はいつの日

山麓を越えて

南に還る

戦争

千度も僕は考へ二人だ

一億とよばれる抵抗のなかで

なにか戦争とは たなまぐ血が溢れ出

ることだ。

そのなかれた血が 赤なしく

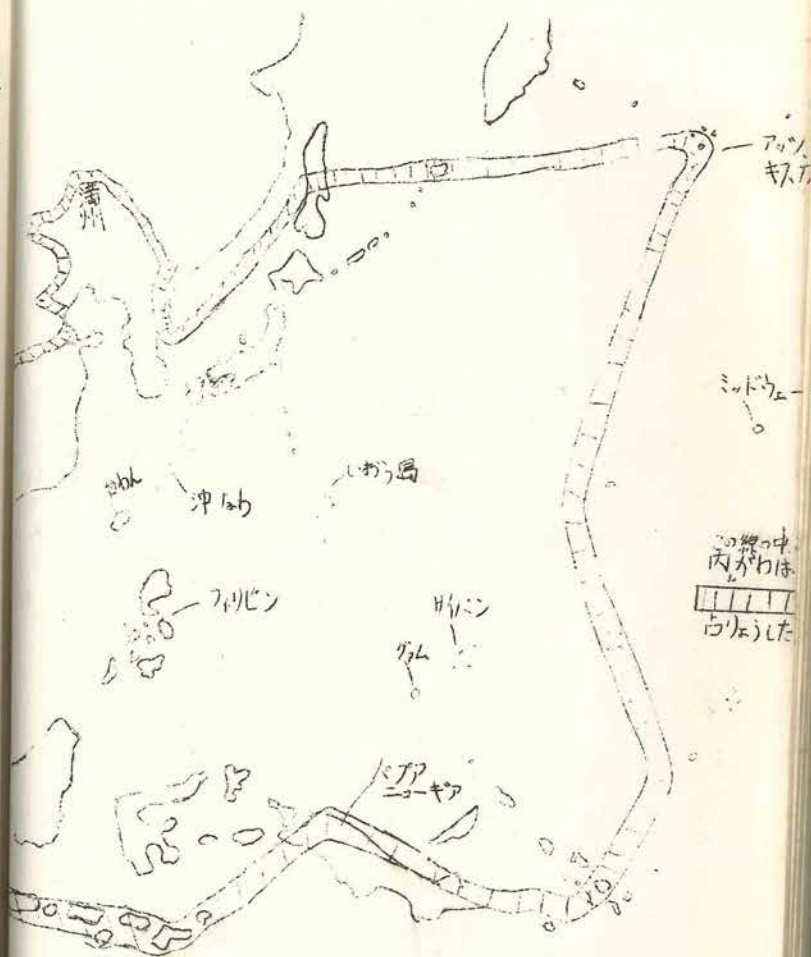
地にすくまわれてしまふことだ。

僕のしりないないだに。僕の血のつぎ

が。

敵も 味方もあなじように

「たなぐ血」と必死になることだ



鉄竹んち様ののらんかつもついでして
大砲や、軍艦に錆直されることだ。

反響したり、時々たりするのは止めて
瓦を作るやうに型にはめて、人間も、
戦力としておくりだすことだ。

十九の子供も。

五十の父親も。

十九の子供も。

五十の父親も。

一つの命令に服従して、左もあき、右

もあき

一つの標的にのき金を、ひく。

敵の父親や

敵の子供に、ついては

ろける七鬼はも頭ない。

それは、敵のたかり。

そして戦争が考へるところによると

戦争よりこの世に立派なことはないので、

戦争より健全な行動はなく

軍隊よりあがる生活はなく

また戦死より名誉なことはない

子供も、まことにうかしやうないか。

互いにこの戦争に生かぬおそれることとは。

十九の子供も

五十の父親も

おなじおしきせをきて

おなじ軍歌をうたつて。

戦争中の国民生活

六、一

お父さんが、二才の時に戦争が始まる。

た、場所には、今の豊戸天神の近く、その

ころの家族は四人だった。そこは、土地

が少く、下町といつて家が密集していつ

、二階の家が多く、とわりの家へ、二階

から移れるぐらいだった。空し、うけい

報で、さうめんがたり、みんな、みんな

した、みんなする所は、ゆか下にはうく

うきうき、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

家の、も、う、う、う、う、う、う、う、う、

の家が見えてもくさの、う、う、う、う、

い、い、い、い、い、い、い、い、

多くて、こま、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、

思いをしなうです。三月五日に夜おこされた。見ると東京が燃えていた。夜だというのに空一面がまっ赤だ。た。何にもかも焼けてしまった。昭和二十年に戦争は終った。



戦争の話

父の生まれたところは北海道で2才の時に、東京にきた。そのときの小学校は1年生から3年生は、緑故疎開で4年生から6年生は、集団疎開だったらしい。父は当時2年生だったのが緑故疎開だった。父の父は長崎で生まれたので、父は長崎へ行った。そこはすこい、いなかだったのび、空襲はなかったが、たべ物に乏しかったそうだ。夏休の八月原子バクダンが、おとされた。

父はその時、となりの空にいたそうだ。

となりの家といってもやく100メートルはなれなかったそうだ。原子バクダンは、山むこうにおとされた。そして父は100メートルしかはなれていない、自分の家にかえれなかったらしい。

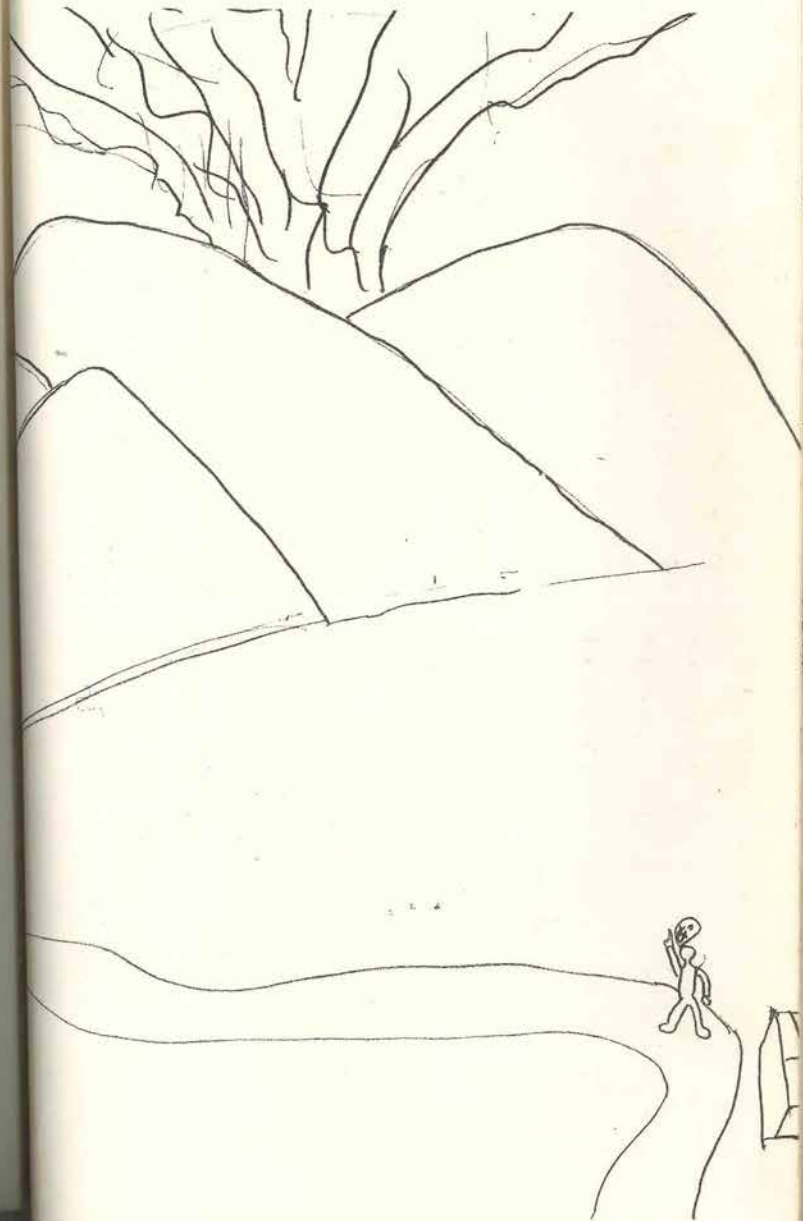
い。そしてその家の人につれていってもらいたらしい。そしてそのときは、大きな台風がきたようだといっていた。そしてしばらくたつと、原バクしようの人たちがいっばいきて村の家のあきやにすんでいらしたらしい。

父は、同じ長崎にいたのによく助かったなあと思った。もしおちるところが、父の住んでいたところだったら生きていないだろうなあと思った。

それとなんで原子バクダンを落とされたのかなあと思った。

あわり





ガラスのうさぎを読んで

ぼくは、ガラスのうさぎを読んで、戦

争とは、とても、ひさんなものだとかん
がいました。第一次世界大戦という、大
きな戦争が、多くの人の命を、うばっ
てしまひ、ぜんこくで、悲しい、日本の
歴史だと思ひます。

社会科で、すこしなら、たけれど、そ
とくわしくしりたいので、この本を説
きました。

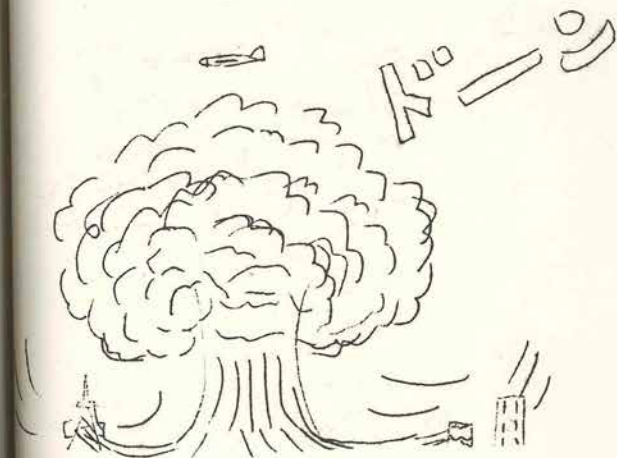
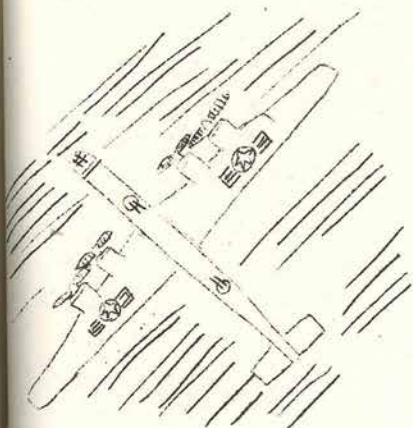
この本を書いた、高木敏子という人は、
実際に、戦争を、けいけんした人で、戦
争で、りようしんといもうことを、うしな

いしても、かわいそうに、なりました。

両国駅というところは、米軍の、戦と
う梅の、まじゅうそうしやで、お父さん
が、死んで、東京の、くうしやうびは、
お母さんと、いもうとが、ゆくえふぬい
にかり、敏子は、あ、ちニ、ちに、そこ
いして、とても、苦しい、生活を、しま
した。でも、おづしらすの、人が、いろ
いろと、しんせつで、さが、たぐす、
でも、いながでは、まきを、あろ、たり
井戸から水をくんできたり、やぎの、せ
わをして、とても、たいへんだ、たと、
かいてありました。

でも、戦争が、おわると、二人の兄が

かえ、ときど、ようやく、しあわせな、
 生活が始ま、そこそこよかったです
 でも、戦争というのは、二度と、あこ
 しこは、いけないと思いました。



猫は 生きていくを願って

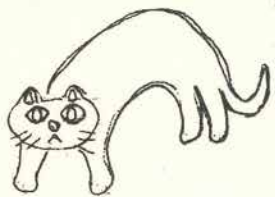
ぼくは、この本を読んで赤ちゃんだ
 は、死なせたくなないと、お母さんが一生
 けん命つめが はげれぬまで穴を ほっ
 て赤ちゃんをその中に入れて、火の粉が
 ら かばったり

川の中で最後の力を、ふりしぼって
 ロープに手をつかんで、猫だけを、すく
 い自分は、力尽きてしずんでいったかわ
 いそうな話だが、たくさん書いてあった
 日本であつた戦争のことで、なんの
 つみもない女の人や、子どもや、年より

が ぎせいになっていった。
 なんて戦争なんかか おきたんだろ
 くらいと思う。
 ほんとうは、だれも人を殺したくな
 いと思う。

これから戦争なんかは 絶対にあ
 ってはならないと思う。

(おわり)



戦争の話

昭和十一年、5月から終戦まで立川飛行場やその近辺に、米軍機がはくけきと、はやくするようになった。東光寺小の上の畑には、大きな高射砲基地があったそうだった。

ぼくの父が、小学校一年のころは学校へ行っても、すぐ帰ってくるような事がたくさんあったそうだった。それは、米軍機がはくけきに来るたびに、急いで帰った。たまに、帰りに木のかきや、近くの防空壕にかくれようなどともあった。家の近くで遊んでいても、立川飛行場

までがけて、かんさい機が数十機を集団ではくけきをしたこともあって、みんなは防空壕やめがけて寝だこんでいたそうだった。すると、立川近辺は、そうとうなひそまうけた。

ぼくは、戦争はいやだなあと思った。

その頃、父や母は福井県武生市に住んでいた。爆心地ではいけれど、やはり、こどもも苦労したそうだった。

母たちの家は、堤防が近くにあって、たので『空襲警報発令』の知らせがあるとき、そこへ非難しました。非難する時は防空頭巾をかぶり、一人ずつ救急袋をさげていきました。そして飛行機が近くなると、頭を伏せました。ずっと近くなると今度は、いつでもにげれる様に寝る時はもんぺをはき、まくらもとには、防空頭巾・救急袋を置いて寝たそうです。『警戒警報』はいつあるかわかりません。

そんなときは、父も母も、非難して、家の外へ避難しました。いまでも、いつも、それは、夜に安心して寝たけれど、たろつと恐いきました。でもなせ、母たちの住んでいる所には落とさず、お、ちよつと離れた小さい村に落とされました。ふつうなら、人がい、ばいという所、所に落とすはずなの、間違われ、落とされたのかとも考えられるけれど、それはまだ疑問です。その時は、バリバリ、⑤とものすごい音がして、母たちはもうダメかと思つたそうなんです。母たちは危機一髪でした。ところ、非難する時は、家に大人が一人残っていないければ、いけません。もし家に火がついた時、

砂袋をたき消すためです。いくら大人でも心細いだらうなア。本当なら祖父が残るはオだったのです。その頃祖父は国鉄の駅員をしていて、駅を守るため、夜、よく呼びだされて家にいない時がありました。祖母がいなない時は祖母が死りました。非難する時は、母、姉(母の二弟(おじさん)が堤防まで行たそう。三人ともまだ小さいおじさんが泣いてこまったそうです。

それから生活の方も大変でした。明りは石間に豆電球が一つしひなかつた。しかもその豆電球にも紙で周りをかこむので明りは下しがこなく、同じなちとも明るくなびたそう。さらに『東京朝報』が知らされるとま戸の周りをぐるぐると黒いカーテンで囲み

戦争の話

母は、よく私に戦争の話をしてくれた。かくわしくは話さない。でもこのまかにいと、母に言ったら、母は、くわしく話してくれた。

食べ物、ありませんでした。朝はむかし多く入った。二はん、昼は朝と同じ。夜は、うんと。それにすつまをほしてたん。二にして食べたそうです。びっくりしたのは、かすのこをいっばい食べたそうです。おやつは、竹のこの皮に、うめぼしをはさんでそれをすった。

飯は、お祭りやお正月に作ってくれた。

ました。カーテンといっても新聞紙をのりではり合わせて、壁で黒くめつた。物でした。(光がもれない様にするため)食べ物、配給はほんのちびり。米はよく脱穀できなくて、みづらぎが交じったそう。たまた、農家に着物などをもって、食べ物を買ってもらいました。が、なかなかな分けてくれませんでした。石けんは物が悪く使っていると中から砂が出ることもありました。いろいろ苦労したり、危ないめにもあったそう。運がよく母たちはみんな助かりました。戦争は、とても良くないことだと思ふ。戦争のために大勢の人々が死んだり傷ついたりした。今の私は、白田で本業にし、おれせに、この文を書いた。しみじみ思ふ。

お母さんは、お母さんのきものを、ほこりて、きものを、作ってくれたそうです。そのころのきものは、絹が多かったです。てしまった。

お母さんは、そのころ、ようち園に行っていて、おゆうぎはしなくて、ふせしの順練をしたそうです。やり方は、4本のゆひで目をおさへ、一本のゆひを耳をおさへたそうです。これを毎日、やっていた。外出する時は、いつもこれに、ぼくうズキをつけて出かけた。

おふろは、一週間に三回くらいしか入らない。そのわけは、まき汁なかつたからです。だから、風のつよい次の日家の

前にある お寺へまきをひういにいって
それに田んぼの 草 もちくすとかよめ
な、せり、あかぐなとたへられるものは
なんでも食べたそうです。

防空こうは、家のつらにあり、家に一
つは、あ、た、母の家の防空こうは、地
面にあなをほり、やねをつけてそのつえ
にうちをのせて草をのせた。中には、た
たみかひいてあり、タニスと大切な物が
置いてあった。母のお父さんは、大工サ
ンだから防空こうの中は、家のようにな
ていた。

母の身内とか新せきには、戦争でなく
な、た人は、いなか、た、でも場所のお

親類のあじだ語った戦争の語

一食へ物：戦争中は、うえてはりな
っ、ビザビ戦後は少くなくなってくる。
一番いやな食へ物は、山へ行つて松
の木や杉の木をのぞいて、全部の葉
をとってきて日なげぼしにして、粉
にして、ぬりけん粉をいれてめん類
にして食べるのがいやだ、どうだ。
生徒全部が学校のグラウンドを巨
やし畑にして、つまいもやじやだい
もを植えて食べた。すといもの
葉やクキまる全部食べて、主にと
もろこしやだいずを主食してた。
田んぼのあぜ道などに生えてくる草
も全部とって食べた、どうです。
勤労ほうし：学校には行っただけ知

じヤんか骨になつて帰つてきた時、また
小さか、母は、近いてしま、てどうで
す。だから母は、二度と人間と人間のこ
ろしあいは、してほしくないと、母は力
をこめて言った。

私は、このような話を聞いて思いまし
た。朝、昼、夜と同じ物を食べたことは
ないし、おやつもすきな物はかり食へら
れる。ひ、くりしたのは、おふろです。
いくら戦争中てもおふろは、毎日入ると
思、た。ようち園でもおふろきけしな
った、そうだし、今の時代に生れ、私は、
しめわすです。

おわり

後は全々し、日、山へかり、二、三に
行、ていた。ふも雨の日、あきは
いの、その時は勉強をしてた。

日本は油が少く、た、た、古く
は、松の木の本をた、て、し、ばら
く、と油が出、て、その油を使
、ていた。

大学生たちは、線路のジャリや砂
を平にき、り、にばらしていた。また
工場に行く人達は、別、な、行、機、に使う
部品などを作、ていた。

集団となり、大、き、び、都、市、は、爆、げ、き、や
れ、や、す、りの、長、男、を、かり、な、な、に、と
なり、した。む、り、た、り、あ、き、が、な、な、た
甘、の、あ、手、に、そ、な、り、し、て、くる、人、は、
60人ぐらいて、みんな東京から来
た、の、あ、じ、さん、は、知、つ、て、る、反、逆、に
合、う、こ、と、が、な、る、き、た、。その人たちは

みんな近くにある学校に通つた。でも東京から来た子ばかりなのを力仕事はできなかった。

仕事をつらなつたこと……山のなかに
ゐるまだ六年生むのにももい木を
しよわさ山にこと。

おへんとうー！おじさん達は みへん

とてをわけてきて
それをお寺にあ

く
る
と

ハ
ン
リ
ク
テ
リ
テ

ぽふあべんとう箱しな残ってなう

それは東京から来た子達はカ

仕事をしたいから、
力仕事している

このうゝう事な可回し又つミ。

卒業、学校を卒業しない時に戦争に

てしまつた人は、今になつてな

「祖父からの便りし

夏休み 戦争について 廣いたり

語へたゞてる宿はたありし飛白

ハと思、事一二、を二で、戦争へ行

て帰つて来たという祖父の事が思

いうが、さ、そく、戦争について

養へてほしいと、手紙を出した。位

かゝるものゝ轉入は、

！。祖父からの便り。！

学校に在学中志願卒業の大正に

早に月く山主兵団に林郎兵として

忍二集監
その後16
区と与
效と
夕顔、
又

軍艦平戸に転勤、中支那方面（上海）

あじは今、四十九才から三世と云ひ

व.

南京、九江、漢口（又北支那方面）

青島 旅順 大連 の左留 日本人

の生命、財産を守り、その周上を

引曰裁期帛即一八年每軍二勸勞一太

阪にしゅう
う職

昭和16年12月8日
大東亞戰爭始

日升
月二
應中
支丑

周長の一之集乙、揚子江の微雷掃夷

揚子江沿岸、播磨の警備、その間

色々の陸軍との共同作戦に参加18

五に月三日商才の火聖にして石舟不

の内の一人、
虫起修理の
ための他の
砲

艇に転乗その間にびたびの敵飛行機

金學にありては生命は財に

五ノ内ノ一ノ厚大のたより

戦。

海軍艦隊全隊支那海軍に引き渡され復員まで支那軍兵に機関等に対し指導教授21年3月28日博多港上陸帰現在に至りました。

現役8年

戦争3年

計十二年大日本海軍勤務

私はこの手紙を読んでも、おずかしくつて、よくわかりません。でもひめゆりの乙女展を見に行ったりして、少しは、戦争の事がわかった。その少しでも、見てアッておそろしがつた。体験もして甘く、まだ充分知らない。それなのに、とてもおそろしがつた。それなら、体験した人や、家族に死なれた人は、どれだけの苦しみを感じたのだろうか。

私の父は、戦時中、小笠原の硫黄島にいた。客は飛行場のすぐそばにあり、飛行機の行き来するのび手にとるようになかる所だった。

真珠湾攻撃の日（零）の朝、飛行機が四、五十機来て、その日の午後三時頃にどこかへ飛んでいった。それが、戦争のはじまりだったとは思ひもよらなかった。

昭和十八年ごろから空しゅうがはげしくなりはじめ、父たちは島の東がわの岩山に深マノメートル位の防空ごうを掘り、そこで生活した。しかし、その中で、火を一切使えなかった。へけむりが出ると敵機にねらわれた。辛い、火山帯だった。ので食事作りなどは地熱を利用した。

きっと、戦争の事などぜったいに思いません。たくないだろう。そんなに苦しんでたえてきている人ばかりいるのだから、私も、少しづらいつらくても、がまんしなくちゃいけないと思つた。私は、戦争などない、こんな平和な時代に生まれてきて、本当によかった。

こんな、ひどい戦争は、もう二度とおこりませんように……。

。おわり。

と昔がとてはげしく、目や耳をおさえてうずくまっていたと昔しかった。

また、食べる物にはこまりなかった。

よくもつは、貯蔵してあったし、やさしい兵隊さんがいたので、いろいろな食べ物をもらった。例えば、固形のみや（今

でいうインスタント）やカンパンやコン

ペイトウなどのおやつなどをもらった。

昭和十八年の秋になって、空しゅうがなおもはげしくなったので、上陸用しゅう

つてい三セキに島の人々が分乗し、六十五セキの船がまわり、父たちは東京にむけて出発したのだった。

しかし、十四才以上の男の人は島に残

って戦わなければならなかった。（当時父は十三才だった）

後に父が聞いた話によると、島に残った人は一人をのぞきみんな死んでしま

後に残った一人がほりまになつて帰つて来たそうだった。

東京へ向う船の中では、十三才以下の子供が船の前後に一人ずつ交代で敵機のまはりをやらされた。

とちゅう、母島あたりで魚のいがみえたがやられず、父島が近くなつて敵機が近づいたという知らせを受けて、父島に入港し、防空ごうに入つたとたん、機いゆうマウレーヤを発射されてしまった。

そして、ようやく父たちが、東京芝浦港にとう着したのは十日後だった。

着のみ着のままで東京に出て来た父たちは、三か所の寺を転々とし、平井という所にいる時に東京大空しゅうにあい、荒川の土手ににげ一夜をあかした。

その後、錦糸町という所に行くところや、亀戸あたりは、辺り一面死体の山で焼け野原で、焼けた死体のにおいでくさ

父が語る戦中戦後の話

私が、父に戦争のことをおしえて、と言つたら、父は少しだまりこみしめじみ話してくれました。母もそうでした。

母は、戦争中満州へ行つていたので、爆撃とか、防空ごうとかあまり知らなかった、けれどある日、ロシア人たちが満州にせめこんできた。母たちはにげた。麦畑の中や暗がりにかくれた。ロシア人につかまると、時計などの品物を取られた。

あるロシア人は、鏡を知らないらしく、鏡の反射を見るとびっくりしたにみたにだった。

かった。

それから、終戦をむかえたのは昭和二十年八月十五日——父たちが堀の内にいたときだった。

こんな話を父から聞き、父は、ずいぶん豊富な体験をしたのだなあとおどろいた。父は、ふだん、こういうことを口にしないので、聞くことみんなが、初めて耳にしたことだった。ずいぶんつらい思いをしたらしい。

戦争なんて、もう二度とおこらないでほしいと—みじみ思つた。

おわり

食べ物。日本人が作つたおにぎり、ぼろろというおかしや、すいとんなどを食べた。満州では、おイモを作つていなかったので、食べた思い出はなかった。食べ物には、あんまり不自由はなかったと言う。

父は、静岡県の小中学校で学んでいた。近くの町の学校は空しゅうにあった。焼けたが、父の学校は大丈夫だった。

服装は、ほとんどの人が、夏はめんかスワのシャツなど。冬は国防色の質素な服で、今の中国みたいな感じだった。敵の飛行機に見つからないよう服を緑に染めたりした。草とみまらかえるように。戦争が終わっても、衣服類は高く、普通の家庭は中々買えなかった。破れたところ

は、他の布をあててつくった。当時の布は硬れやかった。が、しばらくするとナイロンが米国からきて日本で生産されるようになってから急速に衣類が丈夫になり安くなった。くつなどは、中々買えなくて下駄やぞうりの人が多かった。体育などハダシでする人し多かった。父もそうだった。

食べ物では、日本国中が食べ物不足で米などは充分なくてウボチャやサツマイモをご飯のかわりに食べた。ご飯にまぜて食べた。給食などはなくて、イモを持ってくる人もいたり、何も持っていない思い想な人もいた。お腹がすいて人の弁当をぬすむ人もいた。おかしなどはどこにもなくて、かわりに消化薬を

戦争

私は、お父さんと、お母さんの話を聞き、まじめました。

お父さんの家では、農業でもまじくして、麦ごはんとか、サツマイモをほしたのをタンゴにしたり、粉で、そうめんとかも食事としたり。米や小麦の取り入れなどの時期があつても、共出の割り当てがあり、あまり良い食事ではできなかった。お母さんは、ふつうの家で、麦ごはん。まめごはん。わかめのおじや。さつまもちなども食べたそう。

ほうくうこうは、家のちかくに穴をほろ。山に作る人もいる。ほうち

食べた。した。

米国のえん助物資が主で、給食が始まったが、粉ミルクなど今のものとは違ってとてもよく、それに甘くしなんにもなくよくお腹をこわす人もいた。肥満児などはいなくて、みんなやせていた。

私は、父母の話を聞いて、食料不足などで大へんだったと思った。母は、中学一年の時ニナ五等ぐらいしかなくて、私は今の母がそんなやせていまだんて信じられなかった。よっぽと大へんだったということがよくわかった。



の前の山にも、ほうくうこうがいっつひある。ほうくうこうは、じめじめして、いる所で、そこにタンクスやふとんをも、行、た人もいる。高層でほうくうこうの中でねてた人もいたそう。

夜は、電キ・ウにぶろしきをまいて、そのまわりにリユ・クサツクをおいていたそう。まとは外から見えないうちに、し、うじ紙をは、た。だから夜は、くらが、た。

お父さんは、Bが落ちた事を見、たそう。

戦争が終りに近くな、たころ、Bが、という。大形、こうきが富士山の方、とんできて、いまの、第三小学校の西側に、こうし、ほうじんちがあり、大ほうをBにたいしう、た。

りて 午前にいったり午後にい。たのし
て、 時間がまちまち、たそうです。

母は、戦争のために、父を、くしたの
で、戦争がにくいとい、ていました。

母に戦うの話をきいて、（戦争、

[illegible]

うした、今年秋はけんど、こんど、

[illegible]

下口で、
私を人々に、
下ら、
せ、
た。

か
は
い
に
し
う
し

第二次世界大戦の話

戦争はかなりさんにくるものだった。だからそれだけいろいろな体験をしたと思う。その体験を母から聞いた。

戦争中の話

戦争の時は、外にあザリガもれないように
電球のまわりに黒い布をまわりにつけた。す
ると、あかりがもれなかつた。やっぱり、ぬ
る時間は、早がつたわな？　そも母はおぼえ
てないと言つていた。

それから、爆弾を仕込んだ飛行機がとんでくると空しゅう撃報のサイレンがなり、そのサイレンがなると、みんなぼうくうこうへ入

「た、みんなどうも気持ちいいのだからさ
私はたぶん、こゆいな」とサ、おそろしい
なま」とかいろいろあったと思う。

ぼうくうこの中日、日たガ電球やついて
いこうす暗かつたそうです。おやつを食へた
そうです。たしガむかしは ABC のヒスケ
ットを食へたとガなんとガ聞いたことガあつ
たんだと。大豆のいためた物ガなんカを
茶づつに入れてホリホリと食へていたそうで
す。

くうしゅうがある、そのあつたうが、ま
つ赤と。こまきれいだったと言つていた。
それで、母はまだ小さかつたのでこゝれといふ
いう印象があまりなかつたのだ。



戦争中に母は、きかいたことがある。
今の母のいる家は、山梨だけど、ほんとうは
東京の田舎とさいう所で生まれ育った。
でも戦争のための。

田舎↓埼玉↓山梨

と行、たづねた。その時の列車は、ゆががな
く、きこが、あみのようにな、こいて、下サ
まみえた。た、やっぱじいね、たきつこ
す、と中、いろいろな所に、大きな飛行機が
あ、たきつた。

戦後の話

戦後はやはりよくきこえた。食べ物もあ
まりいい物もよく食べたとしても、さつまい

いやな戦争

私は、いつも、なっちゃんの写真館を
見ています。それを、見ていると、戦争
の、くるしさが、よくわかります。私は、
なっちゃんのだんなさんの目に、ガラス
のはへんが、はいたとき、私は、だ
いようぶかな目が、見えなくなるのでは
ないかと、心配した。それから、みんな
は、ばらばらになり、もくてさちにいそ
いで走、てはしりま、つてや、つとそのお
き、おばあさんがゆくえふめいにな、つて
しまった。そして、村を見わたすと、火
の海だった。それに、ながねんづいた

ま、さつまいものつる、とうもろこしのこ
の水とん、大豆、豆すきと他にむにすまは
焼いたパニのよる物、麦、あゆ、山むに
生えている植物など（きいち、のこ、
いたどり、など）を食した。

買った物などは、今の自治会のような所にゆ
りあてて、それを買に行、たきつた。
私は今、いろいろなことを不自由のむに
世の中に生まれま、あわせたむにと
つくづく思った。



この写真館も、もえついて、しまった。

前、わたしは、おばあちゃんに、きい
ただけれど、日本が、戦争にまけたと
き、時計やら、ゆびわや、いろいろなも
のを、とられてしまったと、はな
して、くれました。あと、上野動物園に
原爆が、おちたら、おりはやぶられ、
動物が、あばれたらたいへんだから
と、言われた。上野動物園の人たちは、
動物をころすことになった。なんでこん
なに、いやな戦争は、人の心をくするしめ
で、いやな目にあわせられるんだらう。
それに、動物までも、ぎせいにして、戦
争なんかなんであったんだらうそして、

なんで、戦争なんかや、たんだろう。戦争をやって、なんのためにやるんだろう。戦争を、やっても、いいことは一つもあるわけでもないのに。上野動物園のしいう係の人は、さぞくるしかつ、ただろ。戦争なんか、ないほうがいい、もう戦争なんて、いやだ。

私は、社会科で、人物のことを、勉強したり、戦争の、ことや、いろいろな事件や、できごとを、勉強したり、しました。この中で、私は、先生が、話して、くれた、戦争の、日びの、ことで、とてもいやな、戦争の、ことを、先生は、おしえて、くれました。私だ。

戦争の語

私のおぼあちゃん、ききまーに、第二次世界大戦の始まりは、かりの時の私のおぼあちゃん、今の中野区の家にお住んでいました。東京に、くうーやうの指令がきた時、おぼあちゃんの小見ぐに、長野県の北部、今の長野市の親せきの家で、始めは小見だけをかいて、小見がつかいて、か、だんだん戦争がひどくな、まき、おぼあちゃんもつかいて、おぼあちゃんもつかいて、すくすくやうにあつ

ちは、まだ、戦争に、あつたことが、ないので、戦争が、どんなに、いやか。また、どんなに、戦争の目に、あつて、くるしい、生活を、していたか、しれない。今の、日本は、戦争の、ときに、くらやま、どんなに、平和な、生活を、しているのか。戦争の、ときは、ごはんも、ろくに、たべないでいた。まだ、これから、どういふことで、戦争に、なるか、しれないから、今の、平和を、たいせつに、して、いきたい、と思う。

たきやうです。

配給は、お米、大豆、おまけにおいも、たきやうです。10日に一ぺんぐらいます。それに草花とを、まき、草花も、たきやうです。

毎日の食物は、いもとお米をまき、たべたり、よもぎを、まき、たべたり、たきやうです。大抵は胸は、もちろん財産と食ひ、うです。

苦しい戦争がおわり、ふたたび中野区に帰、まき、歌やほくう、この中のものは、みんなやかれて、たきやうです。

お母さんかたきくと、おもーうい笑い
ながら、大浴です。これは、おほあち
やんの歌でほんとうに、大事です。

戦後は、焼の原で材木屋もなんにもな
くで、すめない時に、おぼあちゃんのお親
せうのうちの子のいなかから材木屋を送つても
らうて、いちばん最初に、おぼあちゃん
のうちが来るさうだ。ほんとうに焼の原
で、お金のあつた人でも材木屋はないの
さみんな、おとういふさうです。そーた
らんと、ドロボウが、いちばん最初に
来ても材木屋が、たといふ今いくらへ
ま大へんけ、大金持ちだと思ひ、ドロボ
ウが家の中へ入り、おごみの中など、

ド
□
ボ
ー
ー

と、さげんだら、せんが、いっせいに
わーん！！」

びくりにたドロボウは、あれてそ
にけたさうです。いちばん最初にた
ち、ふつうより大きい歌で、花をた
てたら大分有。すあか、えんた、

かどんなもかーいません。

このまま、平和がつかうようにと願う

べいまいた。

お
わ
り
:
:
:

いまにこそ、では、むかしの大い前になつてしまひませう。

うちのおはあちゃん、いなかへ親せきがいらぬで、けんがよりは、いにくらゝがでさになうです。おや、いちゃん、は、体がすわりので、**おや**、は、いなかかつてさうです。

私は、種々多數があり、何れ何千の
人か、うゝあいにしなればはるばるいめ
かと思ひます。我々の指図で云々と
血が走る生え死にする、また今この世の中
も我々がかりやうな人न्दです。

今も半分の人下り（私に力も）は、戦争

米 (戦争の詩)

この

雨に濡れた鉄道線路に

散らばった米を拾ってくれたまえ

これはバクタンといわれて

汽車の窓から駅近くなって放り出された

米袋に

その米袋が一つほれ出るまで

このレールの上に レールの傍に

雨に打たれ 散らばった米を拾ってくれ

だまえ

やうさうさ汽車の外へ 荒々しく

更のけつていったが つぎやの女を連れてさ

第二次世界大戦

マくらだすえ

とつて夫が戦争で引かれられ 殺され

とつて財をもなく 残された子供を有

て

とつて命をつないで 残された子供を有

マくらだすえ

とつてその子供の日

こんな白い米を腹一杯喰って 残さぬ

残さぬ 残さぬ 残さぬ 残さぬ

このむきんに散らばれ 残さぬ

食えぬ日本の百姓の辛抱がこころえに米に

向いていれず

一粒ずつ拾ってくれだすえ

に作るよ 残さぬ

おかしがつて ても好きなら 毎

日の 家のうらに来て えんとつにさ

わたり えんとつがあたかたに 店

に来て ときようは せったに作った

はずだ 売ってくれ と言いつめ

たいと そのまま帰ってしまつた

ところが 昭和十七年四月二日に

その父が出征し 母の母と 母の祖

母は おかしなことを仕入れて 店を

開いていた

昭和二十年七月三十一日に ハ王

子大空しゅうがかり 母は 祖母に

兄が母におぶさつて 近くの水道山

に 下げた その時は あぶなくな

にように ふとんをかぶつてにげた

私は 父と母に 戦争中のはなし
を聞きました 母は お母さん(私
の祖母)から聞いたはなしだよ
言って はなしてくれました 父は
お父さんがしたことや 家族から
聞いたはなしだよ と言つて はなし
てくれました

—母のはなし—

母は ハ王子市千人町に住んでい
た 家では おかし屋をしていた
戦前は 母の父が 毎日のように
さとうやあずきで和かしを作つてい
たが 戦争がはじまると さとう等
があまりないので 一日おきこら

父のなし

でも、
い

父
う
い
が
は
ら
の
こ

いぢうに「さうした」

三月の十五日、日曜日、日本とアメリカ
 が戦争になりました。このとき、小池
 新一も生でして、日本軍は戦いに勝つて、
 日本はひとまりおかしなことも、さうぞ
 うでなかった。あちのちが、朝にや
 つてきた。おかし、好き、三つ、衣
 履などが、さう不利になりました。

昭和四年4月、始めて、東京上空にア
メリカの飛行機が飛んできました。戦争
とどんどん激しくなり、前所の人達も、
どんどん出征していきました。父が、小

戦争中、私の父や母は、あま
り、食べ物に、不自由しな
たが、たいていの人
だ、たと思ひます。不自由
私は、戦争中は、どの店も、
全部、やめてしまふと思ひ、
ど、母のはなしから、そうでは
ないと、考えました。

船中より
 舟上りの時、生うまかりと云ふは、
 今迄に、此から、三ヶ所のついで、
 しきり。

三年に及ぶ。それから、コネジのう
 ちから、どうも厭なした。大ぜい
 の人が亡くばり手した。食べ物がぐくぐ
 り町の中にどうすい(金)も(糧)ができど
 う倒を併りきした。前夜の行き、帰りは
 、防空すきんもがぶ。て胸に名前と住所
 と血液を記がいていきした。

戦争の方は、沖合では、激しくなり、神
戸特別行空母隊が出てきて、戦争もおの
りつつありました。

昭和26年3月15日、天皇（い）が、母

た。その時、東京には、時とどが降つて
に降つていきした。もう所には、波のな
り子供達があつて、いそした。金や物
が、時とどが降くなり、米も月に三日ふ
し、いそした。

「さうだね、アメリカ人がしらへてしまつた。すけまじんを何人も殺して、さても急ぐのもびくびくした。」

②・③はそれの序、あづこをさるゝとんとんで、あはしのふもとにいくといふ、あまりのやぶにしろいふで、さうして

戦争の詔

私は、おばあちゃんの戦争のころのことと覚えていたと思い電話をして手紙を書いてもらいました。

おはあちのき

農家は、自分たちで、と食するにけと。こおいて残りは供出しをした。供出とは、政府のほうにきめら水にけお米なども出すことだ。農家は、い家はとも食や物や足りなくて、自分の持物と食物をこうか人しにり、しました。

都会の子ともたちは、敵の空し
うがはげしいので田舎に集団をか
としました。そして、東京の人たち
は、家敗道呉ばかりでもと、田舎のし

てききました。きつてくてもいいおまんとう
が、きつてくが、やけどのあとの人もすこ
かた。その時私は、ごかいで、アメ
リカきらいといつてしましました。そした
ら母に、もから来しました。その時は、きつ
てくが、きつてくが、きつてくが、きつてくが、

うらんどどとつう、たづものもない、
 びりたくすぎ、とつう、
 一人であつた。だから細も、
 さいふも、
 い生ず、
 三が、
 しろでつう

人せき、さうして燃やしました。おれはあ
ちやんの家の倉に東京の人たちとの道
具でいっぱいでした。そかいしない
人達同、けいかいけいはつが、なる
と、防空こうつ入、て敵機が去るの
と待って敵機がいなくなるのと、防空
こうつでました。防空こうつの中で
まっ黒になつて焼け死んだ人がたく
さんいました。有会ほもちろん、田
舎でも物資がなくて着る物も食ふ物
も切付制度になつて自由に買える物
はありませんでした。

親達は、子供たちをのぞりめくつをめんではかせました。干いも、かまきり、大豆などは上等の食品でした。金物類は小さな小さな物でも全部供出せられました。又、若い男の人は全部戦争にいき、残つ

人にも、大変苦労しました。

毎日のように出生する人、死んで帰る人とで地このようでした。

(おゆり)

お母前にお父さんなら戦争の話
をききました。そしてとても大変に
さんにならうと思いました。

お父さんから聞いた話

終戦の時お父さんは小学校二年生
でした。住んでいた所は、群馬県の
山奥へ尾瀬の近くで、Eの戦争
のことはあまりよくわからなかった
ということでした。

お父さんの家は農家ではなかった
ので食べ物に困って、E田舎のつたを
うです。

例えば、お父さんごへかの時代は

戦争の話

父は当時 東京のお並に住んでいたそ
うです。

そのころの食べ物、お米がらったほ
り入っている水っぽいぞうすいとか、お
いそとかでした。

夜は、7きのひこうきにみつかからない
つに、おかりの上に乗るのを、かけ
て、家の板のすきまなどに黒くぬった、
しんぶんしなどをはって、家をまっ黒に
したそうです。

学校へは、週に一回水よう日だけ行
て、あとは、軍へ働きに行ったそうです。

学校におやんとつを持、ていきます
が、食べたから返して食べ物なかった
時もあったそうです。

お母さんからちよつと聞いてみ
たら、お父さんの家は農家だったの
で、食べ物にはあまりにまらなかつたとい
うことでした。

(おゆり)

私は聞いた話で日なく読んだ本で
は、ガラスのうさぎ、もえる日本列
島、お父さんの本などがあります
そして、お父さんの話やお父さ
んの話のように、戦争と日、おそろ
しいものだと思います。これから
戦争の本などたくさん読みたいと思
います。

おゆり

そのときの勉強の科目は、国語、数学

理科、地理、歴史、おそろいたことに英
語まであったそうです。そのとき、ま
だ社会科がなかったそうです。お昼には
毎日、はるさめのカレーにばかりで、ま
ずかったそうです。おやつなど一度も食
べたことがなかったそうです。終戦ま
ざわになるとお米がなくなったので、だ
いずをいってふくろにいれて、それを
おなかがすいたら、ポリポリ食べていた
そうです。だいたいはかりたべていたの
のどがかわいてお水をがぶがぶのんで、
おなかがゴリゴリになったと言っていました。

友だちといっしょにあそぶこともなかったそうです。

どの家にも一つは、ぼうくつ（ぼうくつ）があり、ぼくはきかれると、まっ先にそこにはけむるそうです。ぼくはきかれるのは、いつもB29で、さきにしやういだんをおとし、さらにぼくだんをおとし、火の海にしてから帰っていくそうです。家のまわりには死体があつてにやうしききもちわるかつたそうです。火の中まにけまわり、にけおくれてやけしぬ人が多かつたそうです。戦手がはやくになると、家のききうせい（ききうせい）もさばられて家をこわされてしまったそうです。

父母が語る 戦争の話 六ノ一

私の父は、戦争の時、日野にいました。日野は、ちやうと、飛行機の飛ぶコースになつていたので、空しやうにぼるたびに、B29が、高度をキートルぐらゐの上空を、東京方面をめぐりて飛んでいました。ちやうと、父が、住んでいる近くに高射ほう陣地があつて、そこから、発射される時、大きな音かして、こわかつたそうです。その発射された、爆弾は、一機もあたらないで、飛行機は、やうやうと空を飛び、てしまった。立川基地があつたため、B51かんさい機が、数機の

私は、この話をきいて、戦争はひさんなものだと思いました。人をころしたり、ぼくはきしたり、そんなことしてなんになるのかな？と思いました。もし私たちが大人になつてからまた戦争がはじまつたりしたら、きがくるつてしまふがましれません。これからおつと戦争がおきないといひなアー、いやせつたいおこさないようにしたいと思いました。



へんたいで空や戦を始めたり、爆弾をおとしたりして、家が燃えて、火柱が上がつて立川の方は、空が黒赤だった。

昭和20年の8月1日、八王（やわう）の、大空しやうの時に、しやうめいだんを、落されて、その日の夜空は、昼のように、明るくは、て、まわりの空は、黒赤だった。空には、B29のぼくはけ機が、たいていうとうに照らされて、飛行機が、うかんていた。そのころ、景が、子供であつた父は、とてもきれいに見えて、ぼうくう（ぼうくう）うへにぼるのもわすれて、それみていると、父（祖父）に、早く、ぼうくう（ぼうくう）へ入らばく（はく）てはだめ（だめ）と何度も、おこられ

たという。

私の母は、秋川市で生まれ育ちました。秋川市は、基地がばか。たので、飛行機もほとんど、飛んでこなく、飛んでこたとしても、高くたに飛んでるという感じだ。た。でも一応サイレンがなり、学校で授業が始ま、ていでも、カバコも、ち面白メートルもがけて、家に帰り、防空ごうに入り、飛行機が、飛んでくるのを、ま、ていまいた。

食料の方も母は、あまりこまらず、戦後の不がこま、たとい、てい、る。家の家は、内屋さんだ。たので、油があ、たため、それを食料にかえてもら、たりして

太平洋戦争の話

その1

私は、祖母の所へ行って太平洋戦争の実際に経験した事、知、てい、る事などを聞きました。

そして、聞いてきた事を、食料・学校・家のまわり、家・衣類・住まい、祖父の仕事、空しく、の八こう目に分け、それぞれ、一九四一年〜一九四二年まで、一九四三年〜四四年まで、一九四五年ごろと分けて書きました。

食料の事 一九四一年〜四二年

まだ、あまり不自由はしなかったが、四二年ごろになると配給制度になつてきた。お菓子なども、そのころになると配給で、いくらほしくても、決められた数だけしかもらえませんでした。

戦争中はあまり、食料には、こまらなかつた。のん気だ、たらしい。

そんな事を、父母から聞いて、私は、父の話が、うしろように、思えた。今はこの辺りは、静かで、そんな事は、考えられない。でも本当にあ、たんだと思うと、なんだか、おそろしく思えてくる。こんな戦争は、二度とおこしてはいけないうと思う。絶対にいけないと思う。今は私達は、食料にても、何も不じゃうしてない。こんな世の中が、これからおと、つくといい。

た。

そ、というの

運送の方へ食料がいき、品物が少ないから自分で作らない限り、配給で決められた数だけしか食つたれなかつたのです。また、運送などの交通が不便な為、地方からはこんでこれないのも原因の一つです。

主に食でいたのは、イモ、サツマイモ、わずかな米・雑穀（アワ・ヒエ・麦・うどん粉・そば粉）などです。

一九四三年〜四四年

だんだん食料がなくなつてきたので、ご飯の中に菜葉や、さつまいものじくの皮をむいたのを混ぜてまぜたりしました。田舎の方へ買い出しに行、たりしました。配給のかんが

敵機が来た事を知らせます。それが、夜の場合
は、家の人が電球に黒い布をかぶせ、明かりが
外にもれないようにします。その時、明かりが
外にもれている家は、町長さんが、役員さんの
見回りに来て人に注意され、明かりが外にもれ
ないようにしました。

し、つ中ていとう機が来て、こいきつをして
いき、たまにばくだんを落とすこいきまてた。

田舎の爲、たまにこゝをへつ機がくるべからうと
静かにした。その爲、わりと無心して外に出る
れました。

私のお母さんは、小さいころ四ッ谷に住んでいました。戦争がはげしくなるにつれて、昭和17年ごろ、お母さんは甲府へお引越ししました。お母さんのお父さんやお母さんも、いっしょでした。お母さんのお姉さんは、長野にゐるおばあちゃんへ、そつぱいしました。お母さんのお父さんは、学校の先生だつたので、戦場には行きませんでした。お母さんは甲府につくとお寺で生きながらになりました。戦争が終つて、四ッ谷に帰ってきましたが、家が全部焼かれていたのです。かたなく、学校の

私の感想

「二度と戦争はおこしてはいけぬ」

私は、祖母から話を聞いて、この思ひました。

教室をかりて一年間ぐらハおしました
ー食事の二とー

甲府へそかひしてからのち、食べ物がない人、少なくなつてきました。お寺ででた食事は、ごはんとおみそしる、つけものゐたごはんといつても豆がいっぱいはいつてゐて、ごはんつぶはちぎりゐた。おやつはカンパニが二つ、バターやさとうがちゑとゐた。年上の子が、はみがきに水をいれ、おさんごおたに、まるめたり、食べられるかな、なんて考えたそつです。

四ッ谷に帰つてきてからは、長野にゐるおばあちゃんから、お米をおくつてもうって

そして命をつなぎました。

一日常のこと(その他)

服(おからみ)戦後になるときるものが不足して、

おはあち、

んは自分のセーターなをほ

どきなみして、お母さんの体にあわせて

あんでいき、そしてそれをきさせて、腰は

まにあわせたそうです。お父さんもこ

うだ、たとい、ていました。

ーばくだんのかけりー

ばくだんがおち、数日後(ばくだんの)

かけらがあつ

くなくなったり、かけらを土の中へう

めたそうです。火がかけらについても

えないようにするためです。お母さん

の知、ている人で、その人は、もうほ

りかえしてもいいだろうと思って、集め

たかけらをほりかえしたそうです。そ

してばくだんがおちてきてかけらが、バ

ともえだしたそうです。またかけらを、

家念にもちかえる人もいました。

私はお母さんから戦時中後の話をき

いて、おび、くりしたことがいくつあ

ります。たとえばここにはかへていな

けど戦後のくつが全廃(くつ)でできていた

とか、お母さんの頭に(カカノモ)シラミがわいたとか

などです。シラミがわいた人、ほんと

におそろしいことです。

これからも、ずっと戦争のなハ国になっ

てほしいと思います。

戦争の話

ハリー

母が語る戦争の話

お母さんのうまれたのは、西国です。

二年生の時、戦争がはじくなるため、家

の商売をやめ、おじいちゃん(おじいちゃん)がサウリー

マンになり豊田に、こしてきたそうです。

そのころは、学校に行くにも、ぼう(ぼう)頭

巾を、持ち、教科書も、わら半紙で、今

のよう、カラーで、こんなに、きれい

では、なか、たそうです。授業中も、

おちついて、勉強するひまがなく、空し

う(う)警報のサイレンが、なると家に帰り

ます。その途中、敵の飛行機に見つかり

きじゅうそうし、で、ねうわい、よその

家のかまねの下にもぐり、その時の、お

そろしきは、今でもは、きりおほえてい

るそうです。夜もサイレンが、なると、

なにをしても、明かりが、もれるいよ

うに、黒い布を、電気にまいたり、山に

穴を、ほ、で、防空こうを、作りそこ

にかくれて空しゅうけい(うけい)ぼうが、かりじよ

になるのを、まちます。ぎる物も食料も

はいき。うきめられた量(量)で、おやつは

まめまきにつかう、大豆を、い、て、た

べたり、ごはんも少しの量をぶやうため

さつまいもや、だいこんなど入れておか

ゆのようについたり、うびんも黒い粉で

作、たのを、食べた。それから、外米と
いってつぶの長い米で、ねほりが
なく、ボロボロしていて、とてもまずか
った。おふろ、せんたくも十分でないに
め、しらみが、ついて、頭や体に、ロロ
トと言う白い粉のくすりをかけたりした。
東京と八王子に、バクタンが、あとさい
やけた時、空が、まっかになつた。そうで
す。広島・長崎に原子バクタンが、あと
さい、大ぜいの人たちが、なくなり、今
でも、ほうしゃのうを、あびて、くるレ
ンでる人も、おおぜい、いるそうです。
戦争が、おわつたのは、20年8月15日
終戦記念日として、戦地で、なくなる、人

兵隊さんや、空しゅうで、なくなつた大
ぜいの人たちの、めいぶくを、いのりま
す。

今は、戦争がなくて、私たちは、幸
せだなーと、思います。もしまた、
戦争が、おきたら、私は、どうなっ
てしまうか、そうぞうでできません。
本当に、戦争と言う物は、とても、
おそろしい。私たちは、今生まれ
て来て、さか、たナーと思ひました。

猫は生きて、いるを、読んで

ぼくが、読んだ本は、猫は生きて、いる
という本です。

いつかうち家のえんの下に、のう猫、
いなくなつて住むようになった。

その家の子息男と妹の光代が、えんを、
ひろうとしても、息男たちかいるとけ
。こて出て、えんいほぶなれで、いぬい猫
たちが、空襲の中を、通つて、かいまの所
まで来て、いっしょに、にげたり、りえ、
泳いだりしました。

でも、最後には、おれ主が死んでしま
いました。

もう、戦争は、しない方がいいと思っ
た。

戦争が終わっても三十五年、

あなた方にとっては、遠い昔のことでござい
よう、感じられるでしょうか。でも、

三十五年前、あなた方と同じ年の子供達が
戦争で傷つき、命を失い、親と離れ、飢え
に苦しんでいたのです。小さいかったあなた
方のお父さん、お母さんも、その時代
に育つてきました。

身近かな人々から、そのころの体験を聞

き、戦争が人々にどんな苦しみを与えてい
たか、はだで感じました。小さくて、

記憶になかったり、経験を持たない両親の

人は、戦争の物語や詩も読みました。

ゆたかな物質と高貴のあふれる愛着のもと
に育つとせと、平和であることのありがたさ
と、歴史と学び終わった今、もう一度
みんな確かめ合いたいと思います。

この文集作りに、協力くださった

お父さん お母さん

おじいさん おばあさん

おじいさん

ありがとうございました。

一九八二年二月十七日

西田敦子